「日々の理科」（第 2476 号） 2021,-4,23

「ヤマガラの産卵（２）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

ヤマガラなどのカラ類は、一回の営巣で 6 個から 10 個の卵を産む。それだけ多産なのは、巣立ち前のヒナがヘビの被害に遭ったり、巣だったあとのヒナも猛禽類（たとえはフクロウの仲間）などの被害に遭うことが多いからだ。

写真は 2009 年にフクロウ巣箱内部の様子だ。2 羽のフクロウのヒナ、未孵化の卵が 1 個、それに親鳥が捕獲してきた小鳥が見える。シジュウカラかヤマガラか、また親鳥かヒナかは判別できない。しかしこれは、カラ類が夜間に「ねぐら」を襲われて、猛禽類の餌になる可能性があるという証拠の一つである。

4 月 20 日の早朝にはヤマガラの 2 卵目を確認できた。このあとヤマガラのメスは、早朝（5 時前後）に 1 卵ずつ産み続けることが多い。

初卵を産んだあとは、親鳥（メス）は日暮れ頃に巣に戻って夜間は抱卵、そのまま翌朝に 1 卵産んで、日中は巣を留守にするという日々の繰り返しになる。

4 月 22 日の早朝には 4 卵目を確認した。順調に産卵を続けているようだ。

翌 4 月 23 日には 5 卵目を確認した。この時期は、まだヘビなどの外敵に襲われる心配はない。一番危ないのは、ヒナの孵化後、親鳥がいなくなった時にヘビに襲われることである。注意深く観察したい。